野村生涯教育だより

No. 435

（公財）野村生涯教育センターの
シンボルマーク
［n］は、名称「Nomura」と、
基本理念「自然観＝Nature」の
頭文字を表している。

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

もくじ

● 高齢者として次世代に繋げる責任　高年講座
● パレスチナ支部より近況の活動について
● 学びを生きがいとして
　　駒ケ根読書会での取り組み　長野支部
● 幼児教育部　第 45 期修了式

雲と木道（草津白根）

高齢者として 次世代に繋げる責任

高年講座

このコロナ禍、高年講座では対面での会議を自粛せざるを得ず、スタッフ同士がそれぞれ電話で話をしてきた。二年前責任者のKさんは、全員揃って顔を見て話し合いたいと考え、スマートフォン教室に何度も通い、仲間に伝え、スタッフたちは家族の協力も得て月一度の会議をビデオ通話で行ってきた。

人生の仕上げのこの時期、平均年齢八十三歳の受講生は、野村生涯教育の学びに則り、自分が直面している生活のさまざまな問題を話し合いながら、主体的に生きるには、と精神的自立を目指し学んでいる。

今年二月のロシアによるウクライナ侵攻を課題に話し合いを持った際、初めは皆ロシア側を非難していたが、高年部担当のYさんは「他国を侵攻することは許されないことだが、センターで条件から学ぶことを教えていただいている。私たち人間は本質としての絶対善を持つ一方、本質の開発を阻む悪なる無限の可能性の二面を持つと学ぶ。この戦争から自分の中にある悪なるものを見ていくことではないか」と皆で確認し合った。戦争経験者のスタッフたちは、テレビで戦闘被害の映像を観るにつけ、幼い頃の戦争の記憶が呼び戻され、自分たちに何かできることはないかと話し合った。

定例講座を行わないこの八月、七十七年前広島と長崎の被爆から終戦を迎えたこの機会に勉強会を持とうとなった。

その話し合いではさまざまな思いが吐露された。「ウクライナの子どもが、一人で泣きながら避難先に向かう大人の列に必死について行く姿から、六歳の頃、疎開先で一歳の妹を背負い十キロの道のりを必死で歩いた記憶を思い出し、辛く切ない気持ちになった。そして創設者が『戦時中よりも戦後の方が戦争の悲惨さやどれだけ傷を残すかわからない』と仰っていたが、家や家族も亡くした子どもたちが皆浮浪児となる。当時、自分も子どもだったので、そういう子たちに何もしてあげることができず胸が痛かったことを思い出した。戦争は子どもが犠牲になるので本当に辛い」、「戦争中は十代の多感な時期で、自由にものは言えないし、明日がどうなるか、まして未来のことは考えられなかった」また、沖縄戦を経験した受講生は、映像を観た日はそのときの恐怖がよみがえり夜も眠れなくなる。七十年以上経過しても心に傷を残している。Iさんが「今、世の中が危険な方向に向かっているように感じている。七十七年間平和を維持してきた日本の平和憲法をもっと勉強したい、皆さんと話し合おう」と提案した。

勉強会のテーマを考えるなかで「命がある限りこの平和を未来に繋げていきたい」、「金子由美子理事長から、『当時のことを肌で感じているはずの高年部の皆さんは、戦争経験者が少なくなっている今、その歴史を若い人たちに伝えていく責任があります』と言っていただいたことを心に留めている」、「戦争を通った私たちだからこそ、どの国の誰の命も尊いと感じている。戦争は悪であり、子や孫の世代に平和の継続を願いたい」、など思いが出され、最終的にテーマを「生涯教育 生きる意味を問う ―高齢者として未来を考える―」とし、八月九日（火）に高年部の勉強会を予定した。

しかし、七月中旬より東京近県の新型コロナウイルス感染者が急増したため、オンラインでの開催も検討したが、顔を合わせての勉強会にしたいと考え、延期とした。

延期と決めた後、緊張感が抜けてしまったスタッフたちは、創設者の『老年期を支える最も大切なものは自立の精神と生きがい』の言葉に立ち返り、先を生きる者として、後輩のモデルとなる自分づくりをしようと気持ちを一つにし、多くの方々に呼びかけて開催できる勉強会の機が熟するのを待ちつつ、会議を重ねている。

パレスチナ支部より　近況の活動について

コロナ禍の中でもパレスチナ支部ガザチームは、対面での接触を極力避けながらも積極的に活動を行っている。8月に責任者アマル・エマラ女史より届いた二つの活動について紹介する。

はじめに『子どもの歌遊びの本』出版を知らせるメールが届いた。これまでの夏の活動で行ってきた遊びをまとめ、今後シリーズ化する最初の一冊であるという。親子でパレスチナの伝統を学び、復活させ、保存していくためのものであり、日々の生活で起きるさまざまなことが自分たちの教育課題になることを伝える意図があるとエマラ女史は述べている。

未来の世代へ伝統的な遊びを伝えることを可能にするこのような本の作成は、同支部が長年行ってきた「ライフ・イズ・ビューティフル」プロジェクトが常に掲げてきた目標でもあり、外出を自粛せざるを得なかったコロナ禍の期間は、人伝えに行ってきたことを文字に落としていく時間となったという。

歌遊びの本の裏表紙にはエマラ女史の願いが次のように綴られている。

「もし、教育の目的が心と身体の調和であるならば、母親は子どもにとっての最初の教師です。母親は子どもにとっての最初の鼓動であり、歌であり、言葉であり、最初の遊びの相手です。これらの歌は何代にもわたり語り継がれ、母親への愛着、自己のアイデンティティ、そして故郷を形づくってきました。

子どもたちは遊びながら精神的に安定し自分たちの居場所を作ります。喪失の危機にある伝統を守り、よみがえらせていきましょう。大切な伝統を受け継いでいきましょう。歌を歌い、遊びを楽しむ子どもは、健全に成長していると私は思うのです」

メールの最後には、「この報告を書いている間にもガザでは空爆があり、日常の活動も電気も止まってしまいました。いつものように私たちは被災家族のための活動を行います。私たちが高く掲げた願いと夢はまた地に落ちてしまいました。それでも私たちの自由とすべての人に平和が得られるまで、私たちは何度も何度もやり直すのです」と書かれていた。

八月十七日には、広島・長崎の原爆記念日に際した行事の報告と写真が送られてきた。

「十人の子どもとその家族が参加しました。皆で一九四五年の日本への原爆投下を伝えるドキュメンタリーを見ました。その後、広島と長崎の犠牲者のために、またガザへの攻撃で亡くなった人々のために子どもたちが蝋燭を灯しました。この行事は最近の空爆で廃墟と化した家で行われました。

スタッフのイマーンが日本の戦争とガザへの攻撃で何が起きたか、そして人々に同じような影響と痛みが生じていることを話し、最後に平和の尊さを伝え、それが如何に暴力の連鎖を止める力になり得るかを訴えました。平和こそが、人々が自分は生きていると感じ、自分の尊厳を感じられる第一歩であると。

この困難な時期にガザチームは本当によく頑張ったと思います。私たちはいつも大変な時代だと言いますが、真実、常に大変な時代に生きているのです。子どもたちの顔に笑顔が消えないように活動を続けます」

空爆で破壊された家で

学びを生きがいとして
駒ヶ根読書会での取り組み
長野支部

コロナ禍の影響を受け早二年半が経ち、当センターの全国の各支部・連絡所も、各地の感染状況、自治体の感染対策の方針を踏まえるなか主体的な判断に基づいて活動を行っている。

長野支部は、センター草創期から行政や企業、学校、ＰＴＡ、教育委員会の要請に応え、創設者自身が何度も足を運び、六回の生涯教育県大会を含め数多くの講演会を行ってきた。現在は、長野市・松本市において定例講座を持ち、そして機関紙をテキストに長野、塩尻・岡谷、駒ヶ根、山ノ内、上田の五カ所において読書会を行っている。

その中でも駒ヶ根地区は、一九七七年十二月に創設者が講義をした駒ヶ根講座の終了後、当時の駒ヶ根公民館長と懇談を行ったことから同公民館を会場に読書会が始まり、現在に至っている。

参加者の一人に九十四歳になるＭさんがいる。学び始めて四十五年となるなか、仲間と話し合うことを何より楽しみにしている。最近は足に不自由を覚え移動には車椅子を使い、耳も聞こえづらくなってきたため、電話やＦＡＸでの連絡が難しくなってきていた。近所に住むＳさんはＭさんの家まで連絡を伝えに行くなどサポート役をかってでてくれていた。しかし、八十五歳になるＳさんも杖を使うようになっていた。日頃Ｓさんのボランティア精神に感心している支部副責任者は、さすがにＳさんが車を運転し、Ｍさんと一緒に読書会に来ることが心配になり、そのことを研修・地域担当に相談した。

担当は、読書会に参加し、この学びを通して家族の繋がりを深めることが大事だと思い「近所に住む娘さんに頼めないのかしら？　娘さんにセンターの勉強のことを伝える良い機会にもなると思いますよ」と助言をし、それを受けた副責任者がＭさんにそのことを話すと、Ｍさんは「以前読書会に誘った時に参加を断られたから、娘に送迎を頼むのは嫌だ」と頑なだった。Ｓさんも何度も話したが、Ｍさんの気持ちは変わらなかった。

そうしたなかで迎えた読書会当日、副責任者は心配になりＭさんの家に行くと、やはりＳさんが迎えに来ていた。

副責任者は「Ｍさんの動機が変わらないなかでは、Ｓさんの好意が逆にＭさんが娘さんと近づく機会を奪うことにも繋がるのよ、と言っていただきましたよね。お互いに自分の思いだけで動くのではなく、Ｍさんは娘さんに頼むことを通してご自分の気持ちと向き合ってみてください」と話した。

ＭさんとＳさんは、ほぼ習慣のようになっていた送り迎えが、Ｍさんの娘との関係を希薄にすることになってしまっていたことにハッとし、人の意見や考えをまったく受けつけず、やりたいようにやっていたということが反省になった。その後、Ｍさんは娘さんに事情を話す気になり、頼んでみると快く引き受けてくれ、六月の読書会には娘さんの送迎で参加することができた。そして少しの時間であったが娘さんも読書会に参加し、メンバーと挨拶を交わすこともできた。

野村生涯教育論では『肉体的、経済的自立は自ずと衰えるが、精神的自立は死ぬまで持つことができる』と学んでいる。Ｍさんは研修・地域担当の助言を受け止め、他者の関わりをもらい、自己と向き合うことを通し、精神的自立を学んだ。読書会では娘と共に参加できた喜びと周りのサポートのおかげで学べている感謝を発言した。学びに対する情熱と自分自身に真摯に向き合うことを実践することができた意義深い読書会となった。

幼児教育部
第四十五期修了式

三月二十八日（月）、当センター幼児教育部第四十五期修了式が第二研修会館で行われた。

新型コロナウイルス感染拡大の社会状況に鑑み、幼児教育部ではそれぞれの家族で話し合い、本部研修会館に通うことを自粛する日々が続いた。今まで通りにいかないなかで、金子理事長の「親としてどうあったらよいのか、自らの責任において悩み考えることが大事なこと」との指導を受け止め、仲間同士声を掛け合いながら準備を進め、当日を迎えた。

式当日は、東京、近県の支部から代表の一般メンバーに交じって小学生から大学生までの幼児教育部修了生の先輩たちも共に今期修了生の門出を祝った。

窓から見える満開の桜を背に、本部と静岡支部の幼児教育部メンバー手作りの飾りに彩られた会場に、温かい祝福の拍手の中、今期修了生の村岡凜さん（神奈川）、小田樹君（埼玉）の二名が入場した。

はじめに幼児教育部責任者十文字愛子さんが挨拶に立った。

そして金子理事長から修了生に修了証書と記念品が手渡され、二人は緊張の面持ちで、しっかりと受け取った。

引き続き理事長は『お祝いのことば』として「未だ収束しない新型コロナウイルス感染症、そしてロシアのウクライナ侵攻、日本においては頻発する地震、また北朝鮮の度重なるミサイル発射の脅威など、今年に入り格段に厳しい時代を迎えています。こうした時代を生きていく子どもをどう育てるのか。親としてどうあるべきかをお考えになっていらっしゃると思います。

私は、それにはまず親が逞しく生きなければならないと思います。戦後の豊かさや平和が当たり前の時代を生きてきていますから、子どもがなるべく困難に出遭わないようにと無意識に願っているかもしれません。しかし、生きるということは、困難や悪条件との出遭いのなかで、そこから自らの内にある可能性や知恵を啓き出し、逞しさを引き出すことではないでしょうか。それにはまず親自身が悪条件と思うことと向き合い、自分をつくっていくことだと思います。

本来調和しているのが大自然であると学びます。ではなぜ今このような危険な時代を生み出し、不調和が起こっているのか。それを私たちの足もとから考えていくことが大事なことだと思います。一番身近な夫婦、親子、仲間とどれだけ調和になっているのか。自分中心にものを考えていないか。そうした自己吟味を足もとから社会、世界に広げていけば、きっと平和の方向に向かえるのではないかと思います。

子どもたちが生きる未来に少しでも希望が持てるよう、共に頑張ってまいりましょう」とお祝いの言葉を贈った。

次に幼児教育部前責任者の生形由紀さんが『送ることば』として修了生二人の成長の歩みと、親子で手を繋いで幼児教育部に通う日々のたくさんの思い出をふり返った。続いて修了生がお礼を述べ、それぞれの家族から感謝の言葉が語られた。

二人の修了生は芸術教育部の奏でるバイオリンの音色と参加者の拍手に見送られ、幼児教育部を巣立っていった。

感染対策のため参列が叶わなかった多くのメンバーの思いも籠められた、コロナ禍で三度目の修了式となった。